



皆誹

卷之四



卷之四

和漢發句
春 秋
職人 跋
冬 夏



へ5
1814
4

物見よ茅田く半

春く教

ちりりるも啼や性も身はる

貞徳

次六の晴う〜はるくら〜

真珠菴
加泉

ま〜

妻の好む〜あ〜ふ〜あ〜松の好

紫藤軒
言水

え〜病きて毒り者之の〜

招鶴軒
才山

飼給や香と〜の〜

春程齋
才磨



5

有の歌と地ヲ

青柳を毎日風のまよひて可南 求之

風なりし夜よ海に兒柳うる 尼 言樹

慎勿損愚何汝父耶

カノ子よう侍を如とのぬはる竹亭

三所の袂にうらひひひよ

と唐まてきてそくひひひ

梅母わくと梅よわると笑布哉 方山

相のかゝえも待て三月 可休

鐘撞よひくを待はまきそ 心兮

去の古のぬ懐紙

弟三よとてと寫し

石のけいぬ西かきり 山梅 湖春

とらまは躑躅の柳むきと此 言水

町はく歌集をまきの月待て 如泉

物かりふ歌はとまをたれ離る如 可廻

花の陰を清あのみ

諷しごとせば

象林し豹の捨留花ん 雲 コシ 身輕 葉門

徳くの花の骨ん味タラう由 古山
 釣リ新懸よ釣ッじ志賀の花 幸佐
 咲ぬ木を恨意あり 山梅 脱山
 いよせん 晴ひ屋鋪のお梅 ^{幸門} 和及
 とうろくし 笑くらうまう 山梅 香逗
 山科や東まう海 いそと梅 龜林
 西ひよ逢ぬんらうまよん 梅 可休

夏く教

神の本よ花し我なり執部乙 左甫
 本よいん家まてと麓 日向 如泉
 晴とくく死ぬるもわく舞教乙 竹亭
 牡丹んよまのまのひめ何なり 和及
 与薬や虎の島とん教ん 鞭石
 夏の月柳まうまうのり 幸利 松逗

第三まゝく写し置く

釣初て故屋にありくろくこ舟夜哉 言水

茶とほめはるの病と借墨 加泉

寒うらぬね換とるれ野立て 湖春

重なる帯よりわりのことごとくはれん

故き火きて肉よ飛らるるやん 方山

海山去れおあて

麦酒よ小倉の麩子とほしと 加泉

拾りし目日の忌のほろ夢うね 真珠菴

呼聲や故屋よこころ海山 松木

廣く寝く夢まきとくあはれ哉 琴山

とりのや故よ遠く新酒の碎 荷翠

糸とて柳の葉つとくまね 可休

何んあく誂友ととひり

月美の顔のきしは整つとて

腹立の納りんくた故哉 紅色

我菴き長柄の首蒲のり

西吟

子しめやとまぬ打きま

來山

中よいとらと念仏も唱

鉄硯

短夜やうらうら夜と

万海

無着せし人の涙の

送教とて花の料より

せ免く梅の氣なる

大坂 來山

石竹や誰花とほと捨

監君

登顔と口惜と花の敷

可廻

日登の若らうと

銀糸田 常牧

後よ東家人も同く

雲臺

汲らけて者を知る

可廻

棄人のちくても

全

蓮の盛去年の場

滾水軒

鬼百合も陸か花の

不及

おん人と違ふ水の流るひうね 言水

君妻の人のよきしるし

志のしるしにて神唱す心門涼 可休

意好と盡し殿は戯秋

涼さなは四十よわまは頭うね 如泉

伏ん有南の祥うて

雲風と伏えの海と涼むむ 方山

大坂方海鳥むり

涼みやなうきまてあり難波橋 我黒

あこまきく涼や水の流る師 東林 其諺

おかの小歌流ふまはる時哉 全

懐翁の表第三

涼行中よ笛持ツ尾とこ那 可休

志多らうとよき名ぬ白雨の石 如泉

行是立とのうねのひらきん 信徳

秋之教

来ませ霜の極の五枝や梅モトキ

惟舟

桐の葉やたゆしきらとほ教まじ

可休

七月朔日一筆彩りて

虫の形の形さうこちほらるゝ

和蘭華

水山一じゆそよや張河の包り

才磨

かくて筆いづの遠くそ星の中

鞭石

うらむこの橋がしほの姿ありと

竹亭

七夕を今よりくは^い晴^りの^ま判^り 周也

後^ろに^は笑^ひの^もと^く舞^ひの^星 風山

何やりの集よ月の
夜をたのむわらふは

弓^の矢^の星^の夜^をも^の桂^哉 如泉

せ^もく^く真^の骨^撰の^こそ^も玉^五 方山

采^女な^は人^のう^ら結^と羨^まま^保 如泉

聖^王也^の草^の香^うは^と如^部花^才 磨

高^城の^神や^舞の^心 心兮

日也死也危うくと云
使動して

少^の翁^の先^の朝^顔の^橋を^保 和^及

祿^八の^船は^花の^大う^如 杜木

灯^さり^く足^のお^ちし^秋の^あ 可休

杉^の葉^のも^比の^危なり^と 櫻更

し^のう^や橋^のも^同よ^く 鉄硯

東の海は尾張
春の内の内と歌て

剛寒しふる士らうけく雨は足 可廻

ひあもやほく花壁とまほむら 言水

ゆもろく花壁とまて仁王門 古山

表まゆし福ふま花麻の壁ミタ 全

ん歌およ老角淋一と薄哉 意伯

一海の向と波出と花舞う如 八山

月々むし移よ金わきえきりし 如泉

わりのろや行よはつとわふの月 治劔

名所の歌とよまきし

落して有る物もむららう遠くの月 可休

元山やかうかくまて秋は月 全

歌は國よまじもんあらも

らうはまきし可休とるて

又二りやし

小園の居ゆき花るのかられ哉 心兮

冬之部

山市晴嵐繪讃

心奪人酒罇世々梨瓦法師

李吟

又さくき松の命をけりくま

和及

うくくや松よむくくく玉霰

意伯

は孫く可老うく秋

伯父よらあわそ

風ニカシや定つさあくくたろくも

龜林

酒よらん流りくくくく人そ歌

貞隆

いふ酒の海もやいん聖の書

如泉

惟家の何處そ雪夜よ吹嵐

全

こまやひうくくを雪のさ

身の名とらくくひ落くぬを食哉

西吟

ひひ海遠く娘くく約の雪

松逗

ドノみと後よ書くくや雪れ船

芝雪

らうくく女子あはれい 雪の門

如雲

唐櫻茶換酒
山櫻無近付
螢火安良殿
芟斬頰君盞
蓮盧山木操

雪蓑
蘭齋
弊軒
其諺
雪蓑

八月望前有士來求
落髮之句因以與之

名遠圓成月
松茸其土耳
僧鴨頭應黑
早咲梅瘦我

全
如泉
全
雪蓑

いはのけちも有まじまやちとちとち方
やうや二十四人の職人とならひたちと
まてしとの業と務しふも有る家友
むとむとひやうも業しておれと現はると
其中の垂枕三ツをまわつて先は乳
わゆと乳乳と拾ひえよひよ乳と
先は乳乳と拾ひえよひよ乳と
音と音とひてとつとつとつとつとつと
時分自を四六の敷の満ぬ其自意と
さくらもちひるもかこつとつとつとつと
三つとつとつとつとつとつとつとつと
のあつとつとつとつとつとつとつと

花のおよあつはともはえうね

醫師

わらひらひの南養ぬ所まて

陰陽師

氣とつらそへるるりふ散ぬ蓮の蓮

御師

提樞の隣の礎わらひしち梨

経師

冬板よかひの大造し松むら

綴活

物も八の虹のめんと削らぬ

歯匠

そ清き水やん付し多し水

砥所

羊の姿よりせしんま唯好

真金吹

朔日廿と人や神五月

神子

月夜やむらくの祿ひ物

盲人

名月のむけもやあふ土器所

土器所

燕よりの白土を油らるし

壁塗

一所も偽りありし時白

深原

子菜の間をふるらる園出乳

廷打

去雨や孤姥れ月乃物かろを

陸所

さかもししき本とこしぬ橋りぬ

松和所

飛多河渡く振て奉は海きるを

猪夷打

以奉や屋とれ新買海も

私人

葉子家石の細くぬるる中

針師

山室の目錫引るよわいりく次

錫師

糸丹や毒の香とじは被る物

桂女

大系女のらりくらのやきよの雪

大原女

船起る乃の懐や若あひひま

商人

浪小垂てゆまれは振ざらぬ

泉師

大凡人之評物也^{スル}不必^ス无^ニ舛^ル誤^ラ

然^{レモ}多^ク談^フ不^ル曰^ハ者^ハ愈^ニ於^テ曰^ニ而^モ未^ダ再^ス

顧^ル其^ノ所^ヲ評^ス未^ダ之^トト^カ也^ナ有^リ柳^ノ困^ニ氏^ト

者^ハ於^テ此^ニ雖^モ非^ズ自^ラ慢^ル我^ハ獨^ニ醒^メ庸^ニ不^ル

曰^ク則^チ騷^ク乎^ノ胸^ニ之^ノ語^ヲ依^テ一^ノ卷^ニ憲^ク舉^テ

直^ク錯^ク諸^ノ枉^ニ蓋^シ為^シ使^シ評^カ家^者流^ク各^々

自立也視者商量セリ云元祿之有
 三庚午歲昏南斗中之日江東
 以貫子滌筆於律龍表軒



二條通寺町西入

木屋半兵衛角板



松室軒



